

到達目標策定の傾向と例示—高校での取り組みの例

佐藤 留美

1 はじめに

グローバル化の進む中、意思の疎通を図る道具としての英語学習が不可欠になっている現在、どのような授業が行われるべきなのか。「英語の授業は英語で」とはどういった授業なのか。その問いの答えとなりうると考えられるのが CEFR といえよう。

大学入試を突破するための英語学習ではなく、大学で学問を深めたり、国際人として社会で活躍できるための英語習得のための指標となり得るものだ。CEFR を英語力を図る基準として、高校卒業までにどういったことができるようになるのか、また、どういった授業方法が考えられるかこの章では述べていきたい。

2 高等学校における英語到達目標

高校卒業までには B1、B2 レベルまでの英語力を習得することが望ましいとあるが、高校といっても一括りにはできない。それぞれの高等学校の独自の到達目標もある。本章では、いわゆる難関国公立大学進学を目指す高等学校での到達度について述べていきたい。

2.1 B1、2 レベルとは

B レベルは CEFR の基準では Independent User ということになり、B2 レベルでは以下のことができると記述されている。

Can understand the main ideas of complex text on both concrete and abstract topics, including technical discussions in his/her field of specialisation. Can interact with a degree of fluency and spontaneity that makes regular interaction with native speakers quite possible without strain for either party. Can produce clear, detailed text on a wide range of subjects and explain a viewpoint on a topical issue giving the advantages and disadvantages of various options.

B1 レベルでは以下のとおりである。

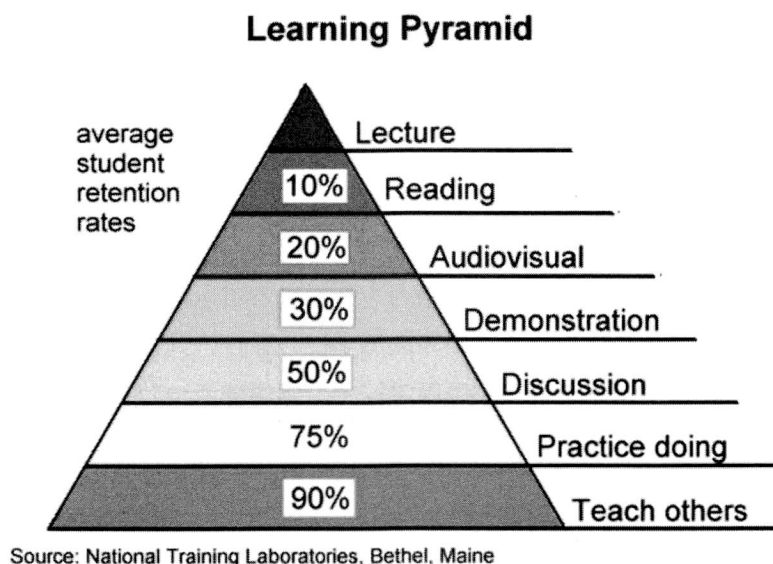
Can understand the main points of clear standard input on familiar matters regularly encountered in work, school, leisure, etc. Can deal with most situations likely to arise whilst travelling in an area where the language is spoken. Can

produce simple connected text on topics which are familiar or of personal interest.
Can describe experiences and events, dreams, hopes and ambitions and briefly
give reasons and explanations for opinions and plans.

どちらも、いくら国立難関大学を目指す学力が高いと言われる高校生にとっても容易ではないレベルである。ではどのようにしてそのレベルに達する授業を行えばよいのか。以下に述べたい。

3 授業のあり方

次に示してあるのは、National Training Laboratory の教育学者、Edgar Dale 氏による Learning Pyramid である。



日々生徒と接している我々はピラミッドの最上段に講義が来るのは納得するのではないか。今までの日本の教育では、教師対生徒が対峙する形式が長い間、学校教育で支配的であり、授業は「決められた席」で「静かに聞くもの」との刷り込みがなされていたのは事実である。このピラミッドはそういった、唯一オンリーの教授法に一石を投じていると考えれば多くの示唆を与えてくれるといえる。目の前にいる生徒にとってどの方法が今最善なのかを教授者が考えて授業を組み立てていくことの大切さを伝えていると思う。

小学生が九九を覚えたりする単純な暗記は脳の発達にとって不可欠であり非常に重要であるといわれている。英語の授業の中でも基本的な語彙や表現を定着させるような手法を考えると、Learning Pyramid の手法が応用できる。記憶の割合を、授業法の割合と考えればよいのである。

- 1) 授業の最初に各課のイントロダクションを教師が行う
- 2) 生徒自身が素材を読む
- 3) 扱っているテーマのビデオクリップなどを見せて実際に使われている英語を聞く
- 4) 扱っているテーマについて自分の意見や感想を書かせる
- 5) 書いたものをピアとシェアして、意見を交換する
- 6) お互いの意見をピアとまとめる
- 7) まとめたものをクラスでシェアする

そうすれば 100%学習した内容が定着するはずである。アクティブ・ラーニングとは「生徒主体の授業」で、いかに生徒が授業で生き生きと学習しているかに尽きる。そういった視点で再度自分の授業を振り返ってみるとよいだろう。

学校教育の変革に伴い、大学入試も改革すべく現在、検討が進められているが、どの教科も思考力、判断力、表現力が一層重視されるような改革が進められている。そして、入試改革は、てっとり早く授業改善を進める手段として大きく変わろうとしている。

外部試験の結果を利用したり、リスニングやライティングを課すなどが考えられている。生徒の英語の力をつける授業を日々行っていれば、どんな入試改革があってもあわてることはないはずである。

3.1 授業は英語で

英語力をつけるためには、英語での授業が必須となる。多くの先生は、年度当初に「今年は英語で授業を行う」と決める。しかし授業を進めていくと「何言ってるかわからない」、「日本語で説明して」、「文法も説明して」と生徒が言い始める。また、他の先生も「英語で授業をしていて、生徒が理解しているかどうかをどう確認するのか」などと聞く。そうになると、授業の中で英語を話した後に日本語でほんの少し説明を加える、文法が分からないと困るからと、文法事項を日本語で説明する。そうしているうちにいつの間にか日本語で授業をしている。こういった経験を毎年している先生も多いのではないかと推測する。英語で授業をするためには教師の側の覚悟がいる。それは

- 1) 生徒の語彙力、英語力に合った英語を使い授業をする。学習してほしい事柄を提示する前にしっかりと生徒の学力を把握する。「高校生なのだからこれくらいの英語力をつけてほしい」とは考えない。目の前の生徒の学力に合わせ、その学力を伸ばすための授業を考える。授業は教師の英語力を生徒に披露し、教師の英語力を伸ばす場ではない。
- 2) 授業のスク립トを用意する。本文の内容理解の Q&A は必ず文章で用意し手元に持つ。そんなふうして準備に時間をかけていると生徒が理解できる語彙、そうでない語彙が分かるようになってくる。また教師が使える語彙が分かってくる。そうすると自然と生徒が理解できる授業になるはずだ。
- 3) 日本語は使わない。英語の後に日本語で説明をすると生徒は「英語を聞かなくても、

あとで日本語で説明してくれる」と考えるようになり、英語は聞かなくなる。2)の準備をしっかりしていれば、日本語の説明はいらなくなる。

- 4) 文法の説明はコミュニケーションの時間は極力さける。コミュニケーションの時間は素材の英語を使えるようになるのが目的である。教師の質問に対して答えられるようであれば、文法の説明などはいらない。また内容理解も質問に答えられれば内容も理解されていると考えればよい。わざわざ内容が理解できているかどうかを確認するのは無意味ということである。
- 5) 語学学習は、エレベータに乗って次の階に行くわけではない。階を順次上がっていくわけではない。試行錯誤をしながら表現をマスターしていく。文法事項も順をおって習得するわけではない。レベルを行きつ戻りつ、スパイラルに学習していく。今わからなくても英語に触れているうちに分かるようになってと達観することも必要である。
- 6) 英語で授業をすることが生徒の英語力を伸ばすことだと自信をもつ。ある生徒は本当に英語が不得意で、英語の音読もクラスで一番遅かった。最初の授業で、「英語で授業?!!!」と目が点になっていた。しかし、音読をし、英語での質問に答えているうちに、リスニング力がついてきたという反応を示すようになってきた。センター試験の後に「リスニングが満点だった」と報告してくれた。また、文法に詳しい先生に教わっていたある生徒は多読が不得意だった。音読し、文法事項の解説もなく Q&A をしているうちに「なんとなく英語が読めるようになってきたような気がする」と授業評価に書いていた。また別の英語が不得意な生徒は、英語ができないので授業で置いてきぼりにされているように感じていたが、英語での授業はどんな発言をしても褒められるのでクラスに居場所ができたと言った。授業評価に記してあった。文法中心の授業は知識がないと居場所がない。しかし、英語を使った授業は学習している表現を使い、身に付ける授業であるから、その練習をすれば、褒められこそすれ、「知らない・知識がない」と怒られることはない。そんな授業が嫌いになるわけがない。教科が嫌いであれば、予習を試みようという気にもなる。当然英語力はつくことになる。

3.2 機器を使った授業

ICT 機器を使う授業を行う教師は次のようにメリットを挙げる。

- 1) 黒板に英文を書く手間が省けて時間がとれる
- 2) 一回授業準備をすれば他のクラスでも使える
- 3) 具体的な写真等を提示し、生徒を刺激できる
- 4) 教師のスペルミスがなくなる

などが挙げられるが、また以下のデメリットもよく指摘される。

- 1) 意識に残らない
- 2) 生徒との距離ができる
- 3) 机間巡視ができない

4) 生徒が受け身になりがち

ICT 機器は上手に使うととても効果があるという教師もいる。ICT を使っても使わなくても、要は生徒が英語を勉強したいと考え、英語力が伸びたと思えるような使い方をすればよいのである。

黒板に間違っ綴り字を書けば生徒が、「先生、その字、間違ってるよ」とか「その字、辞書には載ってないよ」と指摘し、教師が、「ああ、ありがとう」とやり取りができるいい雰囲気授業を行えばよいのである。そういった雰囲気学んでいる生徒は最終的には学力がつくのである。

ICT の教材は一回作ってしまえば、どの教師も同じような授業が可能になる。また同じ科目を何クラスも教えていれば、効率的でもある。言葉で説明するよりも、映像を示せば、インパクトもあり説得力がある。こういった使用方法が効果的なのか、常に考えていくことが必要だろう。

3.3 Autonomous learners の育成

英語力を伸ばすのは、「授業の形式がどうであろうと自分が英語を覚えるか否かである」、「本人の努力次第」と考える既に自律している生徒もいるが、autonomous learners は大きく授業に影響を受ける。自分で「覚えよう」、「もっと勉強しよう」と思える、自発的に学習をしたくなる起爆剤のような授業を教師が行うことが必要となってくる。

そういった授業は必然的に「たのしい授業」である。シーンとして教室で教師の声だけが聞こえる授業からは程遠い授業である。教師自身が楽しんで授業を行う。「高校生だからこれくらいの学力をつけるべき」と目標に向かって構築する授業ではない。目の前にいる生徒がどれくらいの力があり、その生徒の習得している語彙を使い、その一つ上のレベルの語彙を加えつつ授業を楽しんで行うことを目標に授業を組み立てる。生徒や教師とやり取りのある双方向性のある授業である。TV ドラマによく出てくる英語の授業シーン—「〇〇、ここ読んでみろ」、「△△、〇〇の読んだところ訳してみろ」—の対極にある授業を考えてみるとよいかもしれない。

使える英語を身に付けるのは「努力次第」だが、どれくらい自分で学習するのに時間を費やそうと思わせるのが大切であろう。

3.4 目標をしっかりと生徒に伝える

「授業としてやる以上、テストで点をとることに重点をおくのか、社会に出て使えるものをやるのか、はっきりしてほしい。いまの学校での授業はすごく中途半端に感じる」という生徒の指摘はもっともである。しかし、生徒が「テストで点を取る授業」と「社会に出て使える英語の習得を目指す授業」が別物であると考えていることが今の英語教育の大きな問題であろう。本当の英語力がつけばテストの点もとれるだろうし、社会でも使える英語力の基礎となる。そういったことを、きちんと生徒に伝えていくことが大切なことで

ある。

今後、入試改革も進み、こういった生徒の指摘はなくなってくることを期待したい。

3.5 授業をチームで

授業は先生によって「当たり、外れ」があると生徒に思われるのはまずい。どの教師に教わっても B2 レベルの英語力を生徒に付けて卒業させることが必要である。学校として全員で生徒の英語力を伸ばしているという、意識が必要である。教師一人ひとは常に自己研鑽に励まなければならないが、それは一人で授業をするという意味ではない。チームとして3年間かけて生徒を伸ばしていけばいいのだ。構文、文法、語彙をしっかり定着させる授業と、学習するテキストの書かれている内容について英語で意見交換をしたり、討論したり、意見を書いたりする授業と分け、教師の得意不得意を考慮し、分業するのも一案である。

3.6 授業の雰囲気づくり

クラスは構成員の化学反応で思わぬクラスになるというのは長く教師をしているものが往々にして経験することである。そんなに努力しなくても、生徒が生き生きと楽しく授業を受けるクラスもあれば、どんなにこちらが授業準備をしたとしても、全く授業がうまくいかないクラスもある。うまくいかないクラスの改善策はなかなか見つからない。一年間うまくいかずに終わってしまうこともある。

うまくいなくても、生徒間での交流を深め、授業外で授業者との交流を深め、信頼関係を深めることをやめない努力を続けることだろう。

4 教師の心構え

4.1 英語を教えるプロである

「自分は、高校で英語を教えるプロである。英語を教えることに関しては誰にも負けない」という自負を持つ。そしてそれは自分の設定する目標に生徒を引き上げるというのではなく、「目の前の生徒の力を伸ばすことに関しては誰にも負けない」という自負である。英語はツールであることを肝に銘じて、英語で扱う内容についての知識も誰にも負けないという自負を持つ必要がある。英語はツールであるから、英語で書かれたもの、話されたものを理解する近道は、知識を深めることである。英語で扱われている内容が理解できないと英語は役に立たないからである。

4.2 人として尊敬される

生徒に学習意欲を持たせるためには、人として生徒に尊敬されないといけない。人間性を磨くことも非常に大切である。「あの先生の授業は頑張りたい」思ってもらえるよう日々

研鑽したいものである。

4.3 追い詰めない

教師は、生徒に一生懸命勉強させ、少しでも今までより良い点を取り、余った時間には練習問題をやらせようとする。次々と課題を出して生徒を勉強させることがいいことだと思ってしまう。課題を出さない先生を熱心でないとみなしてしまうことも往々にしてある。こうなると生徒は今の自分の学力がどの程度で、自分の学力を伸ばすのには何が必要なのかを考えることをしなくなる。課題が多いので、考える暇もなく言われたことをこなすことになる。「今の子供は言われないと何もできない」、「自分で考えて行動できない」子供たちを教師自らが創っている。

日々追われ、競争にさらされていると、他人を意識し、他人より秀でることを考えるようになる。子どもは「失敗する」、「人よりできない」ことは許されないと考える。そんな自分には価値がないと考える。

「失敗する」、「人よりできない」という貴重な体験を子ども時代に経験させ、そこから生きる力を身に付けさせるのを待てる教師でありたい。

遅刻をさせないために、「〇回遅刻すると家庭に連絡」、「〇回以上だと△△」と罰則を決める担任がいる。そうすると生徒は遅刻しそうになると学校を休むようになる。生徒が遅刻する理由は聞かれず、遅刻は悪いことだと叱られる。親も教師から叱られるから子供を叱ることになる。子どもは遅刻も許されない、完全ないい子であることを求められる。そういった学校は息が詰まる。楽しい学校生活などおくれな。教師を信頼などできなくなる。遅刻したら、普通に理由を聞ける教師でありたい。寝坊した生徒を大目に見る教師の多い学校は生徒がのびのびと大きく成長するのではないだろうか。それは「できない自分」「完璧でない」自分を認めてくれる大人がいるからだ。

5 生徒の意識改革

生徒の英語教育に対する意識を改革し、英語に対する苦手意識を取り除き、学習意欲をどう向上させればよいかについて述べてみたい。

5.1 中学英語から高校英語へ

グローバル化の進む今日、英語が今後一層不可欠になっていくことはどの生徒も予測している。必要不可欠な英語だが、なぜ学習をさせられるのか納得していない生徒も多い。そして、「英語は好きだしできるとかっいいし、これからは必要だと」思うが、「授業の英語は嫌い」という生徒が多い。だから「英語をやらされている」という意識も持つ。

高校入学時に中学校の学習レベルとの違いに驚くとともに、教師が「これぐらいは中学校でやったよね」と先へ先へと授業が進められる。中学校では経験したことの無い「置いて

てきぼり」の感覚を持つ。今までは得意だと思っていた英語が、「できない、自分には無理、不得意な」教科と感じるようになる。

5.2 試験でいい点数が取れないことは英語ができないことではない

「試験でいい点数がとれない」＝「英語ができない」ことではないとの意識を教師も生徒も持つようにする。「英語ができれば、試験でいい点数が取れる」ことはある。妥当な試験であれば高得点はとれるはずである。試験のために英語を学習するわけではない。入試を突破する英語力と社会に出てからも使える英語力の基礎を高校時代に養成することがなんら別物ではなく、英語ができればどちらにも通用するものである。受験英語を突破する力と英語をツールとして使える力は別物ではない。

6 試験制度

生徒や教師の意識改革のためにも外部試験を利用するというのは、有効な手段の一つであろう。しかし、資格試験を何度も受験できる生徒もいれば経済的に何度も受けられない生徒も多くいる。外部試験や新しい試験制度は帰国子女や海外留学の経験のない生徒にはますます不利な試験になるのではないかと危惧する生徒も多い。

外部試験は帰国子女には有利である。海外で時間を過ごせる経済力が生徒の英語の学力に大きく関係してくるといえるだろう。

平泉 渉と渡部 昇一が『英語教育大論争』で論争したように、英語を学習するものとしていないもの、エリート層と非エリート層にますます分断されていくことになるのではないか。学習する意欲も能力もない生徒に多額の税金をかけるような非効率的なことはしないという方向性をとるような社会的雰囲気が出来つつあるのではないか。生徒の家庭の経済格差が、生徒の学力格差とならないような政策がますます必要になってくるだろう。